

寝取られ渾ちやんの告白



成人向け

黒猫屋

僕は、世間で言うヘタレ男子です。

特にこれという信念もなく、またすぐに人の意見に流され、昔から陰の薄い存在した。身長も普通、成績も普通、顔も運動神経も普通、いや、中の下くらいだったかもしません。

そんな僕も恋をしました。

それは中学時代、長い黒髪に整った顔立ち、優しい性格、

男子だけでなく女子からも嫌いという人はいないくらい人気のある人でした。

彼女の名前は秋山澪さんといいます。

もちろん僕は彼女を遠くから見つめることしかできず、

告白なんて考えたこともありませんでした。

残念ながら、僕の恋は卒業とともに自分の胸の奥にしまうことになりました。

でも、先々週の同窓会のことです。

僕は、恋焦がれていた秋山澪さんに再会できました。

再会した彼女はずいぶん大人な雰囲気をまとつてました。

中学のころは男の人を避けるような素振りをしていましたが、

同窓会では、そんなこともなく、男子とも笑顔で談笑していました。

彼女のそんな僕にも笑顔で話しかけてくれました。

僕の心拍は上りました。

そして、僕の恋心はまだ続いているのだと確信しました。

昔、言えなかつた気持ちを伝えよう、玉砕してもいい、そう思いながら同窓会の帰り
僕は彼女に中学時代に好きだつたこと、

そして、その想いがまだ続いていることを告白しました。

・・・彼女からの返事は貰えませんでした。

正確には、返ってきたのは

「本当の私・・・あの少し考え方で・・・」

という意味ありげな言葉でした。

そして、2週間後、僕宛てに彼女の手紙と一枚のDVDが送られてきました。

手紙には、彼女の手書きで

「これが本当の私です。ごめんなさい。」

僕は、一緒に送られてきたDVDを再生することにしました。

●REC

「うん、ちゅば、ちゅば、あふ、あふんつつ
今日は、彼につ、本当の私を教えたいつ、のつ、だからつ、もう、仕方ないなつ」

TVに映し出されたのは、秋山さんが僕の知らない男とキスをしている映像でした。

「これを観てるのは、僕らの澪ちゃんに告白した童貞チ○ボくんかな？」

カスれた男の声が僕に話しかけている。

彼女にキスをしている男とは別の男。

「童貞君にはちょっと刺激が強いかも知れないけど、最後までみるんだよ。
君が好きな澪さんのエロエロなどころを見せてあげるからね。
すぐにティッシュの用意をしてね！」

彼女は男の上にのしかかり積極的に男の唇を求めていた。



●REC

「ヴィイ——ン、ヴィ、ヴィ——ン、ヴィイ——ン、」
といふくぐもつたモーター音が部屋の中を響き渡る。

「わふっ、ん、ううん、あああああああ、あ、あ、あ、あ……」
彼女の透き通った声が嬌声をあげる。

「渉ちゃんはやっぱりスケベだな、最初はあんなに嫌がつてたのに
今じゃマ○コとア○ルにバイブを入れないと満足できなくなってしまったもんね
……あれえ、今日はいつものようにあえがないの?
中学のお友達が観てると、猫かぶつちやうの?
もしかして、童貞チ○ボ君のこと好きだつたのかな?」
今まで声を出さなかつた本人がメラ相当の男の声だ。

「やめて、昔のことだから……」

「ちゃんと言わないと……」
カチツという音とともにモーターの音が強く響いた。

「ヴィイイイイ——ン、ヴィイイイ——ン、」

「言います、言います!」だから、強くしないでらさないと、イッちゃうからつ!お願い……」
「いやあ言ってこん。」

「……は……い……彼のこと、中学のときから好きでした……今でも好きです……」
僕は自分の耳を疑つた。
そして、自分の目も疑つた。
僕の事を好きと言つてくれたのに、彼女は、男たちの前で快感に酔いしれているのだから。

●REC

「澪たん、カメラ気にしなくていいからね♪」

「うん、ちゅば・・・ちゅば・・・じゅる・・・じゅる・・・れろ、ちゅるちゅる・・・・・」
「そ、そうそう、精子出るとこを舌でチロチロするの、ちょ一気持ちいいつ
やつば、すげえ、フェラテク
さんざん、俺が教え込んだからな」

「おいおい、自慢すんなよ、俺たちだろ、俺たち」

「そ、だ、ぜ、お前一人の手柄じやなんだぜ」

三人で秋山さんをこんなにしたのかつ
僕は怒りのあまり幽ぎしりをしながらも、映像から目をはなすことができなくなっていた。

くちゅ

くちゅ

ちゅ

れろ
れろ

「でもよ、風俗でもこんなテク持ってる娘はいないぜ、やっぱ澪たんのフェラチオ最高
やべ、出ちやう、澪たん、いいよね、出してもいいよね」
男は、切なそうな声をだしながら、秋山さんに懇願した。
「出すよ、出すよ、澪たんの顔にぶつかけるよ！」

●REC

ブピュピュピュピュウ

耳障りな音と共に大量の白濁した精子が秋山さんの顔を汚した。
しかし、彼女は恍惚とした表情でその精子を舐め上げ
まだいきり立っている男のチ○コにじやぶりつき、尿道に残る精子を吸い取っていた

んつ

んふつ

ブピュピュピュピュウ

REC

「おいしい、おいしいよお、うんつ、うんつ、うんつ、ガツついちゃダメだよ、あふつ、ああんつ、
その状況に似つかわしくない秋山さんの澄んだ声が男たちを興奮させているようだ。
ジユルルルルルルルツツツ、ブジユルルルルルルツツツ
彼女の股間に顔を埋める男がクリトリスを強く吸い上げてしまふ。

あんつ

？

くくんつ

「やつ、やつ、やんつ」
秋山さんの目が潤んでいる。
悲しんでいるのではない。
男に奉仕し、奉仕されるのを愛しみ、体中を痺れさせる快楽に醉っているんだ

●REC

「おのれ、我慢できぬと、脚をやんげに上げておきのこしてもいいよねっ。
ちちの腰（なか）グサムクキニだからいいよね～」
男は腰（なか）になつた歎山さんの腰筋にそのコをあてがうと、勢いよく腰を振つた。

高と度が身のわり合う間

「ほふんの、一見えていたもう一人の男の内裤を落してしまつた。

あんつ

はうつ
はあつ
はあつ

パンパン

ダメにして、ひざみと咥えてやる。

パンパン

「あ、いや、あんつ……ダメ、感じ過ぎちゃうから……」
彼女（彼女の腰筋の筋は、己の欲望をぶつける様に歎山さんの腰（なか）を蹂躪しつづけた。
えじて、その力を経え直せないと分かる大男は、
「あなたは、このお口の下のお口に吸といひたね」と言いつぶやくと、腰を振りはじめる。」

●REC

「湯ちゃん、バイブで十分ほぐしたから大丈夫だよね♪」

「そういううと、男は、さつきまで
秋山さんの脛(なか)をさんざん堪能していたチ○コをア○ルにあてがい、

そして、彼女の下に潜り込んだもう一人の男は、
秋山さんの口を凌辱していたチ○コを秘部にあてがつた。

二本の肉棒は、同時に彼女の下半身の一つの肉壁を押しのけるようにグゲツともぐりこんでいった。

ズブ
ズブ

ヌチャッ
ヌチャッ

あんつ

あつ

あんつ

「うつ、やつ、ダメつ、一本いつしょはつ、
すぐつ、・・・イッちやうから・・・ダメつ、・・・なの」
秋山さんの懇願は受け入れられず、一人の男は、
タイミングを合わせる様に彼女の脛(なか)と直腸を弄んだ。
「おま○ことつ、お尻のつ、間がゴリゴリするつ、ダメ、何がまちやう」

●REC

んんつ

あんつ
んつ

ドロリ

ドロリ

「やべ、俺、出る！」
ア○ルを犯していった男の限界が急に近づいたらしく、
激しく腰を振り、少しでも快感を得ようとしていた。

「お尻だからいいよね、中で出すよ！
う、うつ」

「…ふう…」
男は満足げにチ○コを抜いた。
ア○ルからドロリと精液があふれだした。

REC
●R「お前らばかりアリーモー」
●E「カメラ担当と思われる男が全裸で、半裸の向井を林山さんに淫しませた」
●C「いつもは3対1の悪勢が普通なのか、彼女は手離れた感じで、
腰上位の様勢で、一人は腰(なか)で、一人は口で、
そしてきつきア○ルで果てた男には手て奉仕していた」

「君ちゃんはいい子たちゅね♪ そろそろ、最後の俺のチ○コが欲しいってことかな?」
「へへ、喜んで。ここで大きいのが欲しいです……」
「じゃあ、今度は腰がきくよ♪ かわ、落たんをイカセちゃつてこ」
「でに、一回下へ落して、腰だらが淫亂から外れていった」

んぶつ

んぶつ

んつ

●REC

秋山さんの恩者は完全に性欲に支配されているようだった。自はとろんとし、男に奉仕することだけに集中していた。

そして、その奉仕している男の男根は、日本人の平均の倍の長さ、太さに加え彼女を愛足せるに足りる硬さも持っていた。

「俺のチ○コ好きかい？」

「好きつ、大好きつ、この精子臭いのも好きで」
彼女は、夢中になつて陸基と嘘のうきじゅぶりづけている。
「これを見ている産員チ○ボ逃ととのあが好き？」
彼女は一瞬、驚いてしまつた。

僕のこと……、思い出してくれたのか……。

「澪ちゃん、本フトは中学のころの彼が好きなんだしょ」
男の声は、秋山さんをなだめる様に柔らかい口調で、
しかし、石撲を言わせない魔力を發していた。

「ほい……、彼のことまだ好きでな」
「魔たちにすつかり肉奴隸の調教を受けたのに？」
一生、澪ちゃんに俺のチ○ボ・味あわせてあげない？」
「それは、それは……、
お願いです、澪のおま○こに魔太ち○ぼ下さい」
「それだけ？」

「私は、みんなの肉便器ですいいかほし精算ください」
僕は画面の中の秋山さんが泣いているように見えた。



REC

ズブズブズブズブズブ
さあ今までの二人の差より
明らかにサイズの違う男根が林山さんの腰を弄ぶようにもぐりこんでいった。

「ひきひきひき」
彼女の悲鳴とも吐息ともれる艶な声が林山の耳元に響く。

大音量の「ジュー・ズン・ジュー・ジュー・ズン・ジュー」という音
男が腰を揺るたび、彼女の子宮口を押し広げてよつよつ音と
水音を交え入れるために垂れ流す愛液が溢れ出す音が繰り返される。
「おお、オメラに向かって、童貞皮被りチ○ボ君に何か言つてあげなさい、
ばい」

「あんつ、ごめんなさい、もうつてもだめない、つ
私があなたのことからすつ、好きでしたつ
林山さんが僕の事を想つていてくれいた。
彼女の目が涙で潤んでいるように見えた。

はつ
あつ
あつ

ジュー
ズン
ジュー
ズン

「でも、ごめんなさい、もうつてもだめない、つ
男がより奥にまでチ○ボを入れようと、腰を林山のお尻に密着させようとしている。
「あ、あああんつ、感じいや、う、の、や、あ、とい、チ○ボに感じちゃうの、
恵太チ○ボなしに生きられないの、」

REC

正常位で彼女は犯されている。
秋山さんはさつきの僕への告白は嘘だったかのように、男に愛を貰だねていてる。

「ああふうう、あふう、あふう、カリガ中で暴れてるつ
子宮まで届いてるつ
エリゴリする！」

「やつば、澪ちゃん、すこりお嬢だわ
ギューギューに締めづける
マ○コが俺のチ○コに吸いついて放さねえしつ
私は彼女の中の誰今まで堪能しようと挿入の角度を変えたり、
腰を震らせる速さを変えたりしてた。

あうつ

あんつ

やつ

ぬ、
ちゅ

ぬ、
ちゅ

ぬ、
ちゅ

あんつ

はつ

REC

海入を繰り返す男根には、愛液が白くなつてまとわり付き、秋山さんが本気で感じていることを証明していた。

「あつ、いやつ、いやつ、ダメっ、あんつ、気持ちいいの、ううう、

胸から、お嬢様しか喜んでこなかつた。

「澪ちゃん、今日は危ない日なんだよね」「でも、中に出してもいいかな？」「普段日なのは知つてゐるけど、この日のために一週間もオナ禁してたんだから、しょよね？」

「あん、あつ、あつ、あつ、は、はい、いいです、澪の中に全部出して下さい」

やんつ

あうつ

あんつ

ズブツズブツ

あんつ

RE^C
今まで以上の速さで挿入を繰り返す男
秋山さんと男の喘ぎ声が映像から飛び出しそうなほど激しいモノになっていた。

トヒツ

ヒコ

トヒツ

ヒコ

いくつ！

んつ

ダメツ



「イッちやうつ、イッつちやうつ、イクうううううう！」
「俺もおお うう、うつ」

ドビュビュビュビュビュビュ
オナ禁をしていたという男の精子が溢れ出し、シーツに白濁なシミをつけていった
カメラは、彼女の満足そうな顔を映していた。



僕は、いつの間にか、ガチガチに硬くなったチ○コを握りしめていた。
そして、テレビに映る彼女の恍惚とした唇にチ○コを押し付け、精液をぶちまけていた。

あとがき

みなさん、こんにちは。

もしくは初めまして、黒猫屋と申します。

この度は、黒猫屋の同人CG集(?)をご購入頂きありがとうございます。

今回は、「寝取られモノ」に挑戦しましたがどうでしたでしょう、

ちゃんと澪ちゃんは寝取られてたでしょうか？(←オイラが言うなw)

何はともあれ、みなさんに喜んで頂けたら幸いです。

今回は寝取られましたが、他にも描きたいジャンル、

例えば今や御禁制になりつつあるロリッ子モノや凌辱モノ、ふたなり、獣姦など

色々ありますが、がんばって挑戦したいと思ってます。

(Flashとかゲームとかも作りたいですね～♪)

まだまだ画力や話、構成も拙いですが、日々精進していきたいです。

長文失礼しました。

では。

2010.09 黒猫屋